

## 通所介護サービス

# 京都式えらべるデイサービス推進事業

## 新たなデイサービスのあり方を求めて



船越 理志

Funakoshi Masashi

京都府保健福祉部高齢・保険総括室  
介護保険推進室介護予防担当主任

要支援者に対しては、要介護者と区別されて、新予防給付として「介護予防通所介護」という介護予防サービスが提供されます。京都府では平成17年度、全国に先駆けて、介護予防を視野に入れたデイサービスのモデル事業を実施しました。そして、一定の成果が得られたため、平成18年度からは本格的な普及を目指しています。ここでは同事業の概要を紹介します。

京都府では平成17年度に「京都式えらべるデイサービス推進事業」(以下：えらべるデイ)のモデル事業(通所介護カフェテリアプラン導入事業)を3つの施設で実施しました。これは、デイサービスセンター等で一般的に行われているいわゆるレクリエーション活動に着目した事業で、介護予防の取り組みの1つのあり方を探ったものです(図1)。

この事業は、プログラムへの「参加意欲」と、改善して通所を終えたときや自宅での「継続性」を主なテーマとした点で特徴があると考えています。

この機会に、「えらべるデイ」の内容とモデル事業の成果についてご紹介させていただきたいと思います。

### “えらべるデイ”モデル事業の内容

高齢者が楽しみ・やりがいを感じられるデイサービスを提供する

今回の介護保険制度の改正では、「介護予防や機能訓練の視点」が重視され、またその趣旨からデイサービスセンターのレクリエーション活動を見ると、

集団的処遇で画一的

職員主導による一方的なサービス提供になりがち

その場限りで一時的な楽しみに終わっているという現状にあると考えられます。

そこで、施設があらかじめ多様なメニューを用意し、利用者はそれらの中から参加したいメニューを自ら選択し、複数の小グループに分かれて活動を行っていただきました(写真1、2)。

ただし、設置する小グループは一定期間同じものとし、利用者にはできるだけ同じグループで継続して活動していただくこととしました。

というのは、職員は利用者を援助しながら計画的に活動内容を深めることができますし、利用者にとっても、1つの活動を自分のものによって楽しみ・やりがいを自ら追求でき、意欲を持って自主的・継続的に取り組んでいただくことができるからです。そうすることで、生活機能の向上につなげていけると考えました。

また、個別ケアを実現させるため、職員の意識改革を促し、利用者の自主性を尊重してもらうとともに、利用者1人ひとりに援助の目標を設定し、記録・評価することにより、その目標に合った意図的な援助を職員には心がけてもらう

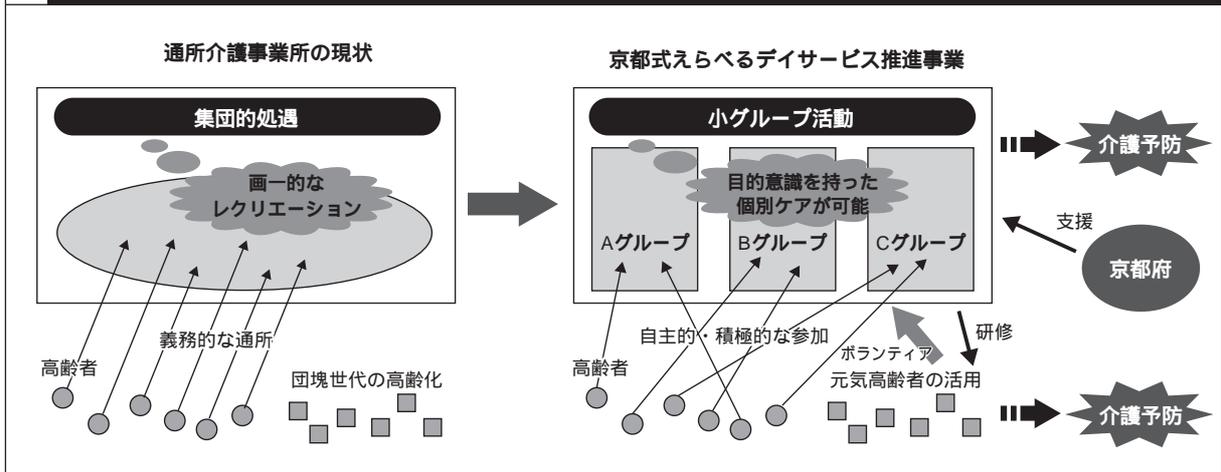


写真1 小グループに分かれて活動。手前は陶芸グループ



写真2 ボーリングの体感型テレビゲームを楽しむ利用者。ゲームを使ったグループも効果大

こととしました。

元気高齢者の生きがいがづくりや介護予防につながる

団塊世代の高齢化に対応するため、元気高齢者にボランティアとして“えらべるデイ”に参加していただき、生きがいがづくりの場を準備するとともに、元気高齢者自身への介護予防効果も期待しました。

ボランティアは、自分の特技を教えたり披露したりすることよりも、利用者の自立をサポートすることが重要です。そのため、お互いが学び合い、共に楽しむという姿勢で、一緒になって小グループ活動をしていただくというボランティア像を基本としました。

## モデル事業の成果

モデル事業の実施前後に、利用者・家族・職

員・ボランティアにアンケート調査を行うとともに利用者へのアセスメント調査（MARRCC：<sup>62ページ</sup>表）を行いました。

調査結果についてはさまざまな分析を行いました。その一部をご紹介します。

### 利用者の変化

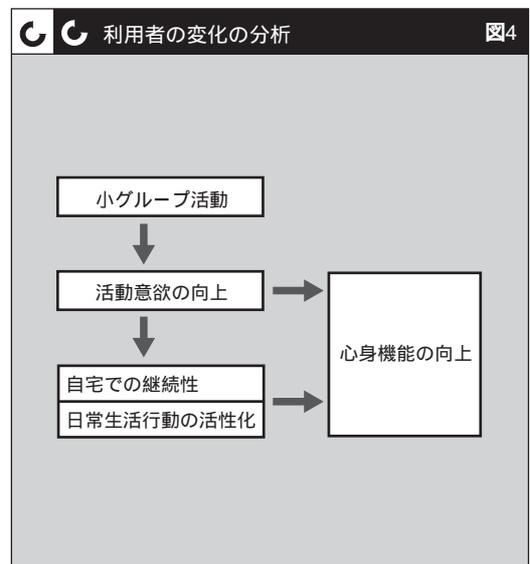
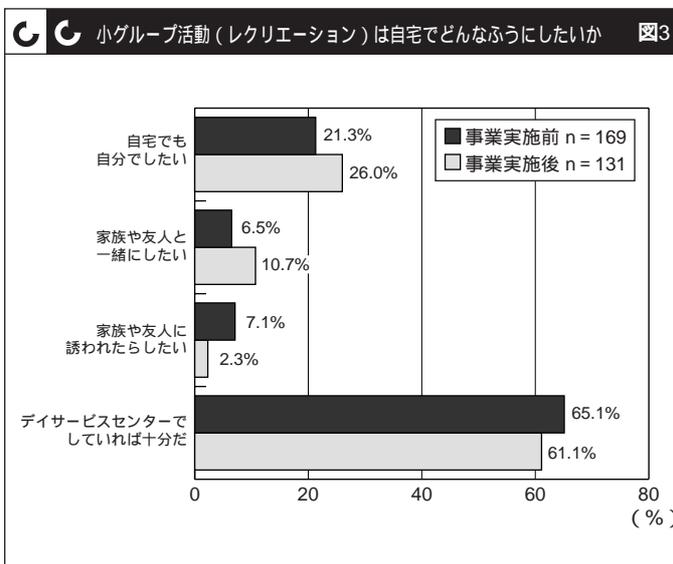
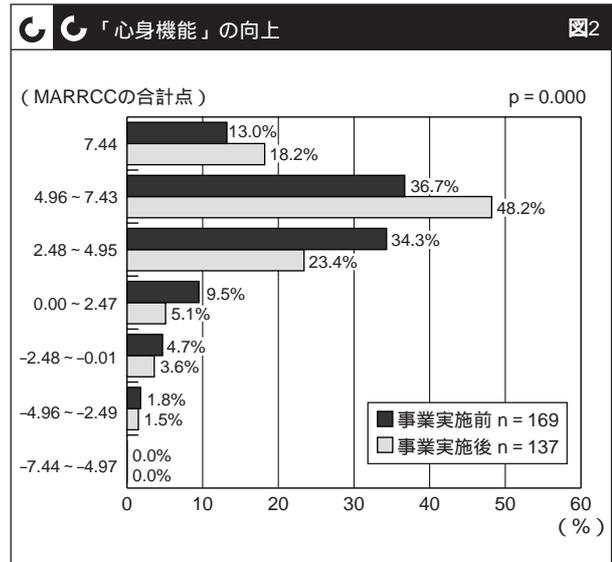
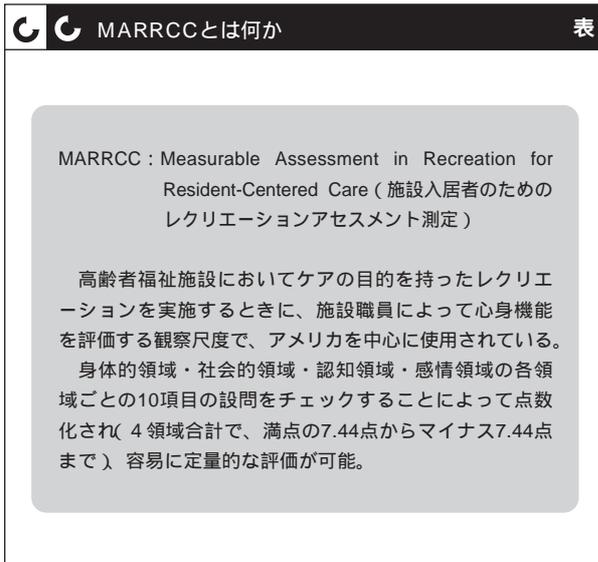
#### 自主性の創出

利用者に会話が増え、活動しながら「次はこれが見たい」という意思表示をするようになり、それによって小グループの次回の活動内容が決定されるようになりました。

#### 活動意欲の向上

小グループ活動に打ち込んで次々と活動内容を発展させていったり、自分にできることはないかと役割を求めて活動に溶け込んでいく姿が多く見られました。

結果的に、一度決めた小グループを変えようとする利用者はほとんど見られなかったことも



**活動意欲の表れだと思っています。**

残存能力の発揮・自己実現

あまり用いることのなかった能力や以前特技としていた能力を発揮できたり、麻痺していた手が動いたなどにより、利用者自身が自らの能力に気づいて自信を持つようになりました。また、つくったものを販売したり公共施設に提供することが社会貢献・社会参加となり、「やりがい」を求めて通所するという新たな形が実現しました。

介護員からは、「今まで援助しなくてよいところ今まで援助していたことに気づかされた」という声が聞かれています。

**心身機能の向上：図2**

身体的、社会的、認知、感情の各領域とも機能が向上し、事業実施後は有意に改善しました。

**自宅での継続性：図3**

自宅に材料等を持ち帰って活動を続ける利用者が現れたほか、自宅で小グループ活動の準備や練習をする利用者がいたなど、活動が日常生活の一端に組み込まれ(さらに日常生活の支えとなり)活動の継続意欲がうかがわれました。

**日常生活行動の活性化**

自宅でも「笑顔が増えた」「会話が增えた」など、在宅における日常生活も活発になったと報告されています。

#### 利用者の変化の分析（図4）

利用者の変化を分析したところ、小グループ活動により活動意欲が高まる。活動意欲が高まれば、自宅での継続性が生まれ、日常生活行動を活性化させる。活動意欲や自宅での継続活動、日常生活行動の活性化は心身機能を向上させる要素となると考えています。

### 事業成功のカギは“個別ケア”

#### 職員の個別ケアのあり方 個別ケアとは？

介護予防事業をはじめ介護にかかわるスタッフに「あれこれと援助することが利用者の満足につながるのだ」という意識はないでしょうか？

しかし、事業の最終目的は「在宅生活の維持・質の向上」であり、そのために利用者に応じて内面の力をいかに引き出すか、それが「個別ケアの第一歩」だと考えます。

例えば個別ケアの観点からは、ものづくりをするときに「もの」を上手につくって完成させることは目的とはなりません。ものづくりを通じて、利用者ごとに設定された目標を念頭に置きながら援助することが大切です。

また、いきなり利用者に「自由にしてい」と言っても、なかなか「これがしたい」と言えるものではありませんし、利用者がバラバラに活動するわけにもいきません。

そこで、あらかじめ「小グループ」を準備し、その中で利用者の自主性を引き出しながら利用者の真のニーズをつかみ、活動を発展させること、そして楽しみ・やりがいを自ら追求する活動意欲を高め、自主的に活動を続けてもらうことが重要になります。それが「個別ケアの本質」なのです。

小グループであれば、職員と利用者、利用者同士、利用者同士とボランティアとの間でコミュニケーションが活発になり、職員が利用者1人ひとりにまで配慮が行き届くようになるので、個別ケアが可能になります。

#### ボランティアをどう巻き込んでいくか

ボランティアを募集するに当たって特別な特技は求めず、何をしてもらうのかも漠然としていたため、なかなか集まらなかった施設もありました。また、ボランティアの中には利用者や施設の状況への理解が十分でなく、活動になかなかなじめない人もいました。

しかしながら、最終的には「こんなサービスだったら私も利用したい」と言うボランティアもあり、多くの方から「生きがいを感じた」との回答がありました。

ボランティアは利用者と比較的年齢が近い元気高齢者なので、若年の職員よりも利用者との会話や意欲の引き出し方もうまく、活動に行き詰まったときなどには適切なアドバイスやアイデアを出してもらうようなこともありました。

ボランティアにも“えらべるデイ”の活動趣旨や自らの役割を理解してもらい、職員・利用者とともに共通理念を持ちながら活動できたことが成功の要因と考えられます。

### 今後の展開

昨年度のモデル事業で着実な成果が見られたことから、今年度は京都府内に本格的に普及していきたいと考えています。

表面上「小グループ活動」をするだけで利用者の変化へと結び付くわけではありません。小グループ活動を通じ、利用者に楽しみややりがいを感じてもらうとともに、施設においては“個別ケア”を行うことが「京都式えらべるデイサービス」のねらいです。このため、各施設、各職員がいかに事業の趣旨を理解しながら力強く進めていくかが課題です。

また、利用者の心身機能が改善して通所が終了したときの受け皿が問題となっていますが、改善してもボランティアに立場を変えて引き続き“えらべるデイ”に「通所」することで、介護予防の継続的取り組みが可能なシステムとして機能させたいと考えています。